

# 特集

## フェアトレードと貧困削減



# フェアトレード研究のためのブックレビュー

佐藤 寛

これまで、フェアトレード関連の日本語書籍はさほど多くなかったが、二〇〇八年に一挙にかなりの冊数が出版された。これは、フェアトレードの日本社会への浸透を反映したものであると同時に、同年五月に横浜で開催されたアフリカ開発会議（TICAD-IV）に関連したアフリカに対する関心の高まりなどとも関係があるろう。以下では、フェアトレード研究を行うに当たっての基本的なブックレビューを行う。なお文中の出版年の表記は（日本語訳／原書出版年）とした。また※印の文献は巻末「ブックシエルフ」コーナーと重複している。

### ●入門書

数年前までフェアトレード成立の背景などについての入門書としてはブラウン『フェア・トレード―公正なる貿易を求めて』（一九九八／一九九三）が、日本語で読める唯一のものであった。ブラウンは一九八五年に今日的な意味で初めて「フェアトレード」という言葉を使った人物であり、イギリスのフェアトレード専門商社TWINの代表という実践者でもある。その

後ランサム『フェアトレードとは何か』（二〇〇四／二〇〇二）が翻訳された頃から、フェアトレードという言葉が少しずつ日本社会でも市民権を得始める。日本の各団体のフェアトレードへの取り組みはそれぞれ別個に、それぞれの理由に基づいて開始されてきたが、そうした諸団体のネットワーク・情報共有を目指す動きもようやく始まっている。これに先行する欧州のネットワーク団体であるFINE編『これでわかるフェアトレードハンドブック―世界を幸せにするしくみ』（二〇〇八／二〇〇六）（※）は、フェアトレード中核の四団体が作成した入門書であり、フェアトレードの仕組みと理念を整理し、生産者支援のためにどのような取り組みが可能かを論じると同時に、消費者に対しては「良心的な消費行動」を、企業に対しては社会的責任（CSR）に基づく行動を呼びかけている。本書の後半では綿、コーヒー、手工芸品、米の四品目についてフェアトレードの事例を紹介している。本書は現時点での世界のフェアトレードの趨勢を理解するには適切な書と言えよう。日本人の手になるヨ

ロッパのフェアトレードの現状と背景をまとめたものとして清水『世界に広がるフェアトレード―このチョコレートが安心な理由』（二〇〇八）がある。今後は、こうした日本人の手になるフェアトレード入門書が増えることが期待される。

### ●南北間の不平等貿易を巡って

フェアトレードの出発点には、現在の国際貿易体制の「不均等」、「不公正」といった認識がある。南北間の不均等な交易問題を提起する書としては、古くは「従属論」に属する論考、さらには「世界システム論」などがあるが、直接今日のフェアトレードの議論につながるものは、途上国の農産品、農産物加工品を巡る流通過程で生産者がほんの一握りの収入しか得られていない、という現状を指摘する研究である。

そのような研究対象となる代表的な作物がコーヒー、そしてチョコレート原料となるカカオであった。オクスファム『コーヒー危機―作られる貧困』（二〇〇三／二〇〇二）は、二〇〇一年頃当時の国際コーヒー価格の暴落に伴う途上国のコーヒー農



家の苦境を描き、先進国で飲む一杯のコーヒーの価格のうち、ほんの数パーセントしか生産者には渡っていない、という事実をかなりセンセーショナルに発信するものである。コーヒーを含めてより包括的に現在の国際貿易体制の問題点を「歪んだルール、先進国の二重基準」という視点から告発し、フェアトレードの取り組みの推進力となったのが、オクスファムの『貧富の公正貿易・NGO』（二〇〇五／二〇〇二）である。

フェアトレードが批判するのは、生産者の収入が低いことばかりではない。児童労働は、環境破壊と並んで、現在のグローバル経済、南北格差の発露として、フェアトレードの前提となる批判の対象である。児童労働に関する入門書としては日本のNGOであるACE編『私8歳、カカオ畑で働き続けて』（二〇〇七）が、児童労働問題の背景を説明し、いくつかの児童労働の事例を紹介しており、基礎知識を得るには適切な入門書となっている。また、低賃金、劣悪な労働条件の工場労働、いわゆるスウェット・ショップ（搾取／苦汁工場）問題は一九九〇年代のナイキに対するボイコット運動で注目を集めるようになった。東南アジアにあるナイキの下請け工場（韓国・台湾の下請け企業を勘定に入れば孫請けとも言える）の状況を報告したものに、アジア太平洋資料センター『NIKE: Just DON'T do it—見えない帝国主義』（一九九八）がある。また、直接フェアトレー

ドに結びつくものではないが、ハーニー「中国貧困絶望工場」（二〇〇八／二〇〇八）はグローバル化の下の貧困者の搾取とメカニズムを示しており、フェアトレードとも同根の問題を提起する。

もともとフェアトレードはグローバル化、それもWTO主導の市場経済推進の弊害を訴えて登場したという出自があり、二〇〇九年二月に国際フェアトレード連盟（IFAT）が、名称をWFTO（世界公正貿易機関）へと改称したことは、WTOへの批判をより鮮明にするという意味があるのだろう。他方、WTOの枠の中でより公正な貿易を実現しようという意味でフェアトレードという言葉が使われる場合もある。その代表例がノーベル経済学賞受賞者でもあるステイグリッツの『フェアトレード—格差を生まない経済システム』（二〇〇七）（※）である。反市場万能主義運動論としてのフェアトレードを「大文字のフェアトレード」、「WTOのルールを前提としつつ国際貿易をより公正にするための取り組み」を「小文字のフェアトレード」と呼ぶ使い分けも行っているが、両者のアプローチにはまだかなりの隔りがある。また、やはり国際経済学者のコリアー「最底辺の一〇億人」（二〇〇八）の中でも、貧困削減のツールとしてのフェアトレードに触れているが、フェアトレードによって貧困者を市場に招き入れることは「現在の仕組みの中に貧困者をロックインすること

になる」可能性があるとして批判している。国際貿易の上で先進国の二重基準的対応が問題になることも多いが、その代表例としての綿製品を中心に展開するリポリ『あなたのTシャツはどこから来たのか』（二〇〇七／二〇〇五）は、いわゆる「先進国の保護障壁」について、米国の繊維業界に焦点を当てて分析している。オクスファムやボリスの批判を経済学的に検討し、とりわけ政治化された先進国の「保護主義」に問題があることを認めつつ、自由貿易への志向が諸悪の根源ではないという立場から、WTO議論に新たな視角を付け加えている。

また、直接フェアトレードとは関係ないが、若い世代を対象に世界の貧富の差について問題提起し、何らかの行動を訴えかけるものとしてホワイトバンド運動があった。ほっとけない世界のまずしさ編『ほっとけない世界のまずしさ』（二〇〇六）は、フェアトレードの基礎的な文献として位置づけることもできよう。

### ●品別の実態

先進国の消費者啓蒙運動（消費者の社会的責任論）にとっては、人々の身の回りにある商品がフェアトレードに対する関心を喚起するきっかけとして重要な役割を果たす。主として一次産品取引に伴う不正、生産者が搾取される仕組みについての問題提起はカカオとチョコレートが代表的であ



る。カカオに関してはキャロル・オフ『チョコレートの真実』(二〇〇七/二〇〇六)があり、コーヒーについては日本人による最初のフェアトレードの研究書とも言うべき辻村『コーヒーと南北問題』(二〇〇四)がある。本書は「フードシステム」という視点からの研究書である。村田『暮らしの中の食と農—コーヒーとフェアトレード』(二〇〇五)は農業経済の立場からの分析である。

現代の農産品の不均等取引に関する告発の書として、フランス人ジャーナリストのボリス『コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コシヨウの暗黒物語—生産者を死に追いやるグローバル経済』(二〇〇五/二〇〇五)がある。グローバル経済に強烈な批判を加える著者は、フェアトレードに対しても問題の本質的な解決には結びつかないと批判している。邦訳書では日本のオルタナティブ(ALT)の堀田氏がこうしたシニカルな見方に対して批判的解説を載せているのが興味深い。

コーヒーに関しては、メキシコのオアハカ州での先住民民族によるコーヒー生産を通じた取り組みと、ヨーロッパにおける最初の「フェアトレード認証」である「マック・ハーベラー」成立の経緯を当事者が綴った『フェアトレードの冒険—草の根グローバルズムが世界を変える』(二〇〇七/二〇〇七)は、ケーススタディとしても、実践者による記録としても興味深い。

リトビーンフ&メイドリー『フェアトレードで買う五〇の理由』(二〇〇七/二〇〇七)は、コーヒー、カカオに限らず様々な商品の実例を通してフェアトレードの「利点」をひたすら挙げていくアドボカシーの書であるが、フェアトレードのカバーする範囲の広がり把握するには良い入門書となっている。

### ●日本の現状とアドボカシー

ここ数年、日本のフェアトレード研究を引っ張ってきた長坂寿久編『日本のフェアトレード—世界を変える希望の貿易』(二〇〇八)(※)はフェアトレードの基本的知識、認証制度の利点と問題点、日本のフェアトレードの現状を概説しつつ、日本の主なフェアトレード団体、フェアトレードショップの当事者の声を掲載しており、それぞれの思いが伝わってきて興味深い。同じような顔ぶれによる長尾編『みんなの「買う」が世界を変える—フェアトレードの時代』(二〇〇八)は、より運動論的な色彩の入門編である。

なお、日本におけるフェアトレードの取り組みが、欧米に比べて遅れて始まったとはいえ「不均等な取引」、「途上国の犠牲の上に成り立った先進国の消費社会」といった認識が日本に無かったわけではない。むしろ、かなり早い段階から先鋭的な形で問題提起はされていたのである。それが鶴見良行『バナナと日本人』(一九八二)であり、

村井吉敬『エビと日本人』(一九八八)である。実際、この流れをくんでオルタナティブ(ATJ)が、「民衆貿易」という名でフェアトレードに早い段階から取り組みだしていることは、押さえておく必要があるだろう。村井はATJの活動を踏まえて『エビと日本人II』(二〇〇七)で、フェアトレードに関する考察を行っている。

このほかに、手記的になるが実践者の自伝的なものとしてピープル・ツリー代表のサファイア・ミニ『おしゃれなエコが世界を救う—女社長のフェアトレード奮戦記』(二〇〇八)、マザーハウス代表の山口絵里子『裸でも生きる—二五歳女性起業家の号泣奮戦記』(二〇〇七)は、いずれも「社会起業家」的な側面にフォーカスしており、どちらにも「奮戦記」とついているのが興味深い一致である。

日本の現状は、フェアトレードに関するアドボカシーが必要な段階であることを反映して、今のところ「フェアトレードはいかにすばらしいか」を紹介する書籍が隆盛の中で、やや異質な視点からフェアトレードの現状を分析しようとしているのが三浦『フェアトレードを探しに』(二〇〇八)(※)である。推進派によるフェアトレード擁護の言説に対して客観的な視点から考察を加えようとするフィールドワークの視点は、今後のフェアトレード研究の一つの可能性を示しているといえよう。

なお、本特集と同様に様々な立場から



フェアトレード現象について立体的に理解しようとする最初の試みとして、季刊『ait／あっと』八号(二〇〇七)があり、日本におけるフェアトレード研究の最先端を紹介している。フェアトレードを「どのような社会・経済現象として捉えるべきか」に関するいくつかの試論は今後深めていくことが期待される。

(さとう) かん／アジア経済研究所研究支援部)

### 《文献リスト》

- ①オクスファム・インターナショナル著『コーヒー危機―作られる貧困』筑波書房、二〇〇三年。
- ②オルタ・トレード・ジャパン編『季刊ait／あっと』八号 特集 フェアトレードの現在』太田出版、二〇〇七年。
- ③キャロル・オフ『チョコレートの真実』英治出版、二〇〇七年。
- ④サファイア・ミニ『おしゃれなエコが世界を救う―女社長のフェアトレード奮戦記』日経BP、二〇〇八年。
- ⑤児童労働を考えるNGO ACE『わたし8歳、カカオ畑で働きつづけて』合同出版、二〇〇七年。
- ⑥清水正『世界に広がるフェアトレード―このチョコレートが安心な理由』創成社、二〇〇八年。
- ⑦ジャン＝ピエール・ボリス『コーヒー、カカオ、コメ、綿花、コシヨウの暗黒物

語―生産者を死に追いやるグローバル経済』作品社、二〇〇五年。

⑧ジョセフ・スティグリッツ『フェアトレード―格差を生まない経済システム』日本経済新聞出版社、二〇〇七年。

⑨辻村英之『コーヒーと南北問題―キリマンジャロのフードシステム』日本経済新聞社、二〇〇四年。

⑩デイビッド・ランサム『フェアトレードとは何か』青土社、二〇〇四年。

⑪長尾弥生『みんなの「買う」が世界を変える―フェアトレードの時代』日本生活協同組合連合会、二〇〇八年。

⑫長坂寿久編『日本のフェアトレード―世界を変える希望の貿易』明石書店、二〇〇八年。

⑬ニコ・ロイツェン、フランツ・バン・デル・ホフ『フェアトレードの冒険―草の根グローバルイズムが世界を変える』日経BP、二〇〇七年。

⑭ポール・コリアー『最底辺の一〇億人』日経BP、二〇〇八年。

⑮ほっとけない世界のまっしぐら』扶桑社、二〇〇六年。

⑯FINE編『これでわかるフェアトレードハンドブック―世界を幸せにするしくみ』合同出版、二〇〇八年。

⑰マイケル・バラット・ブラウン『フェア・トレード―公正なる貿易を求めて』新評論、一九九八年。

⑱マイルズ・リトビーノフ、ジョン・メイドリ―『フェアトレードで買う五〇の理由』青土社、二〇〇七年。

⑲三浦史子『フェアトレードを探しに』スリーエーネットワーク、二〇〇八年。

⑳村田武『暮らしの中の食と農―コーヒーとフェアトレード』筑波書房、二〇〇五年。

㉑山口絵里子『裸でも生きる―二五歳女性起業家の号泣奮戦記』講談社BIZ、二〇〇七年。

㉒オクスファム・インターナショナル、渡辺龍也訳『貧富・公正貿易・NGO』新評論、二〇〇五年。

㉓鶴見良行『バナナと日本人』岩波新書、一九八二年。

㉔村井吉敬『エビと日本人』岩波新書、一九八八年。

㉕村井吉敬『エビと日本人II』二〇〇七年。

㉖ピエトラ・リポリ『あなたのTシャツはどこから来たのか』東洋経済新報社、二〇〇七年。

㉗アジア太平洋資料センター編『NIKE Just DON'T do it―見えない帝国主義』一九九八年。

㉘アレクサンドラ・ハーニー『中国貧困絶望工場』日経BP社、二〇〇八年。